

烏丸中学校屋内運動場増改築にともなう発掘調査報告

(財)京都市埋蔵文化財研究所

1 はじめに

今回烏丸中学校体育館を建て替えるにあたって地下にある遺跡が壊されてしまうため、事前に埋蔵文化財の発掘調査を行なう運びとなりました。調査は、7月から11月までの約4ヵ月にわたって行い、大きな成果をあげることができました。

2 調査地について

烏丸中学校の敷地は、現在学校の南東に位置する相国寺の旧境内に該当します。

相国寺は室町時代はじめ、1383年に三代將軍足利義満によって創建された禅宗の寺で、当時は南は一条通、北は上御霊神社、東は室町通、西は大宮通にわたる広大な寺域を領有していたといわれます。幕府は南禅寺を上位とする五山の制を定め、相国寺はその第二位として天竜、建仁、東福、万寿寺とともに重んじられました。また1467年の応仁の乱の際には細川勝元が、1551年の天文の乱の際には管領細川氏がそれぞれ陣をかまえ、これらの戦いで寺域はことごとく焦土と化してしまいました。

ところで今回の調査地の他にも相国寺旧境内にあたる場所で、過去に何度か調査が行なわれています。烏丸中学校敷地内でも、体育館の東側の校舎改築にともなって調査が行なわれ、相国寺の塔頭の一部と考えられる建物基壇のほか多数の室町時代の遺構を検出しました。

3 調査結果

調査の結果、室町時代の堀や柱跡、平安時代の溝など多くの遺構を検出しました。以下時代ごとにその概要を報告します。

<室町時代>

調査区の西半部及び南端部で合わせて5本の堀を検出しました。これらの堀は、幅1.8～3.5m深さは1.5m前後で一番深い所は2m以上もあります。堀が実際に機能していた時期は室町時代後半(15C後半～16C中ごろ)で応仁の乱や天文の乱で相国寺に陣が置かれていた時期と一致します。数本の堀が同時に機能していたわけではなく極短期間のうちに掘られては埋まるという事が繰り返されたようです。また、堀を埋めていた土層の観察から水流の痕跡は認められずいわゆる空堀であったと推定できます。堀からは大量の瓦類や土器類が出土しました。

調査区ほぼ中央部にある土壇30には焼けた土、炭がぎっつりと詰まっており、火災後の

処理跡と推定できます。ここからは大量の瓦類、土器類が出土し、その大部分に火を受けた痕跡があります。

土壙30のすぐ南側にある土壙90からは土師皿という素焼きの皿が大量に出土しました。底部が突起した通称ヘソ皿と呼ばれる小皿が多く含まれますが、この皿は室町時代の特徴的な土器の一つです。

調査区の南部には東西6mにおよぶ石列がありました。すぐ北側には柱穴が多く見つっています。これらの柱穴から建物の復元はできませんでしたが、おそらくは石列を境界としてその北側にはなんらかの建物が建っていたのでしょう。

<平安時代>

平安時代の遺構には3本の東西溝があります。これらの溝からは土師器や須恵器の他に平安時代の特徴的な土器である緑釉陶器も出土しています。烏丸中学校の敷地は平安時代には平安京外にあり、文献や絵図などの史料は残されていません。周辺の調査例を見ても平安時代の遺構は確認されておらず、今回の溝の発見は大きな成果の一つです。

なお、調査区から出土した遺物はコンテナにして160箱におよびます。瓦類が大半で、時代別に見ると室町時代のものがその多くをしめています。特徴的なのは遺物の多くに火を受けた痕跡があることで、このことは相国寺が創建以来何度も火災にあっている記録と一致します。（年表参照）また瓦類の中でも埴が多いことや、陶磁器に「卍」が印されていることは明らかに相国寺と関係するものでしょう。さらに中国などから輸入された陶磁器類も多く、これらの貴重な品は相国寺に献上されたものかもしれません。

4. まとめ

今回の調査では相国寺に直接関係する建物などの遺構は検出できませんでした。しかし室町時代の遺構の密度や遺物の内容は、明らかに相国寺と関係するものと言えます。なかでも複数の堀が切り合っで見つかったことは一番の発見です。これらの堀は寺の西端において本陣を守る防御のために掘られたものと推定でき、いわゆる戦国時代と呼ばれる当時の様子をうかがい知ることができるでしょう。

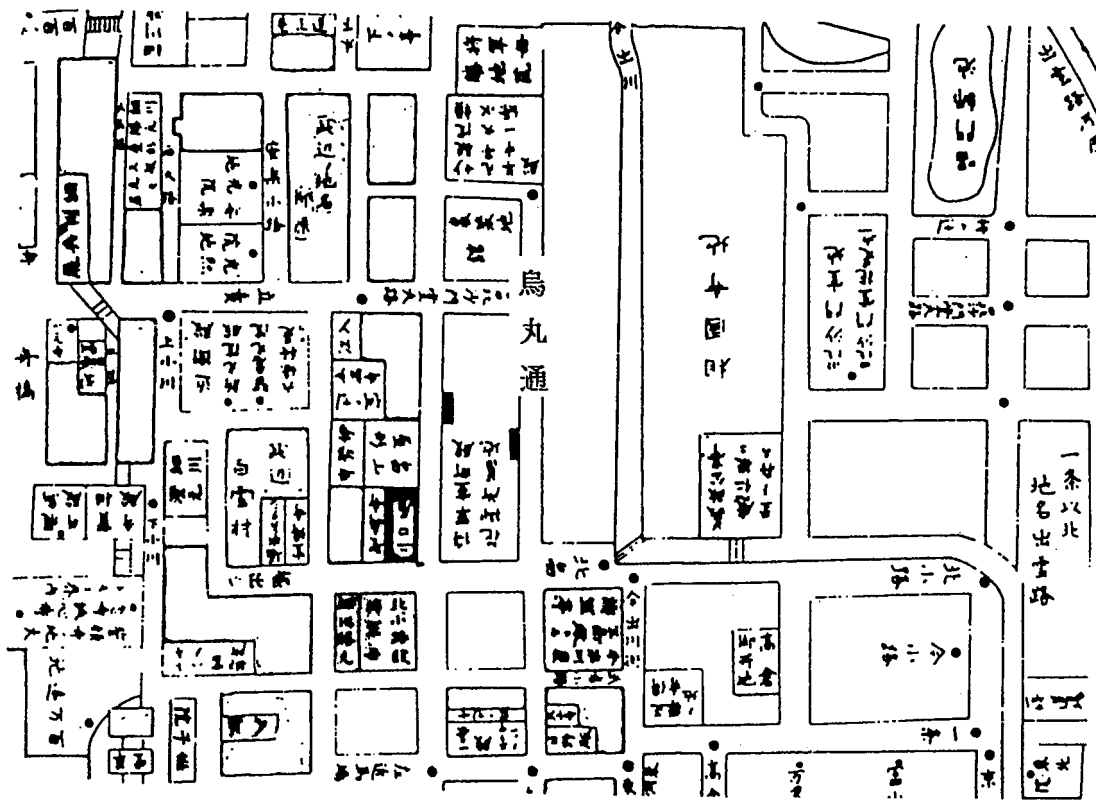
また調査前には予想していなかった平安時代の遺構があったことも大きな成果の一つです。文献などの史料の少ない平安京外の研究をするにあたっては、このような発掘調査で得た資料が重要な意味をもちます。今回発見した溝や遺物も、どのような性格のものなのか整理作業を進めながら十分に検討する必要があります。



応仁・文明の乱（真如堂縁起より）

応仁の乱

幕府の管領家畠山・斯波両氏の相続争いをきっかけに、將軍家の相続争いがからみ、当時、幕府の実権を握ろうとして争っていた細川勝之と山名宗全（持豊）の対立が、激化するにいたって、応仁元年（1467年）ついに両軍の戦いがはじまった。細川方は相国寺（東軍）に、山名方は堀川の西、持豊邸（西軍）に各々陣を構え、やがて、戦いは地方の大名を巻き込んで、各地ではげしい戦いが展開された。11年に渡る戦乱の結果、主戦場であった京都の町は焦土と化し、相国寺をはじめ由緒ある寺社や公家の邸も多く焼失し、重宝、記録、美術品の失われたものも無数であった。この後、幕府の力は完全に失われ各地で権力をめぐって戦いがくり返される戦国時代がはじまったのである。



室町時代の相国寺付近

表1. 堀状遺構の形態と規模

(単位：m)


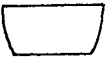

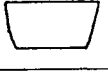

	断面形	検出面での幅	底部幅	深さ	底レベル
溝14-1		2.5~3.5	1.2~1.3	1.8~2.2	56.00~56.60
溝14-2		1.9~2.2	1.0~1.2	1.8	56.60
溝19		2.2~2.8	1.0~1.2	1.1	57.26
溝50		1.8~3.0	1.6~1.8	1.2	56.78
溝140		推定2.5~3.0	1.0~1.2	1.5	

表2、相国寺の火災に関する記事

和 暦	西 暦	事 項
応永 1	1394	9月24日、真歳寮より出火、伽藍ごとごとく灰塵に帰す。
10	1403	6月、落雷により七重大塔焼失。
32	1425	8月、塔頭賢徳院より出火、伽藍のほとんどを焼失。
文正 1	1466	12月、延暦寺僧兵、当山付近で京極の入道と武力衝突。総門、鹿苑院塔、南門、蔭涼軒、東門、鎮守堂などを焼く。
応仁 1	1467	(1月18日、応仁の乱始まる) 10月、山名方の攻撃により、大塔を残して伽藍を焼失。
天文20	1551	7月14日、三好長慶の将松永久秀、当山石橋付近で細川軍と戦い寺に乱入、諸堂を焼きつくす(天文の乱)。
元和 6	1620	2月、方丈、開山塔など二堂十三院を焼く。 2月晦日、上京新町京屋町の民家より出火、室町、柳原町を経て本山の諸堂伽藍の塔頭各院も火災。
寛文 4	1664	5月朔日、常德院災す。
天明 8	1788	1月30日、宮川町より出火。2月1日、火は当山に及び、法堂ほか数院を除いてほとんどを焼失(天明の大火)。 2月朔日、四条宮川町より出火し大内に及び、全京を焼く。火災は当山にも及び、諸堂伽藍、塔頭、子院を焼く(天明の大火)。

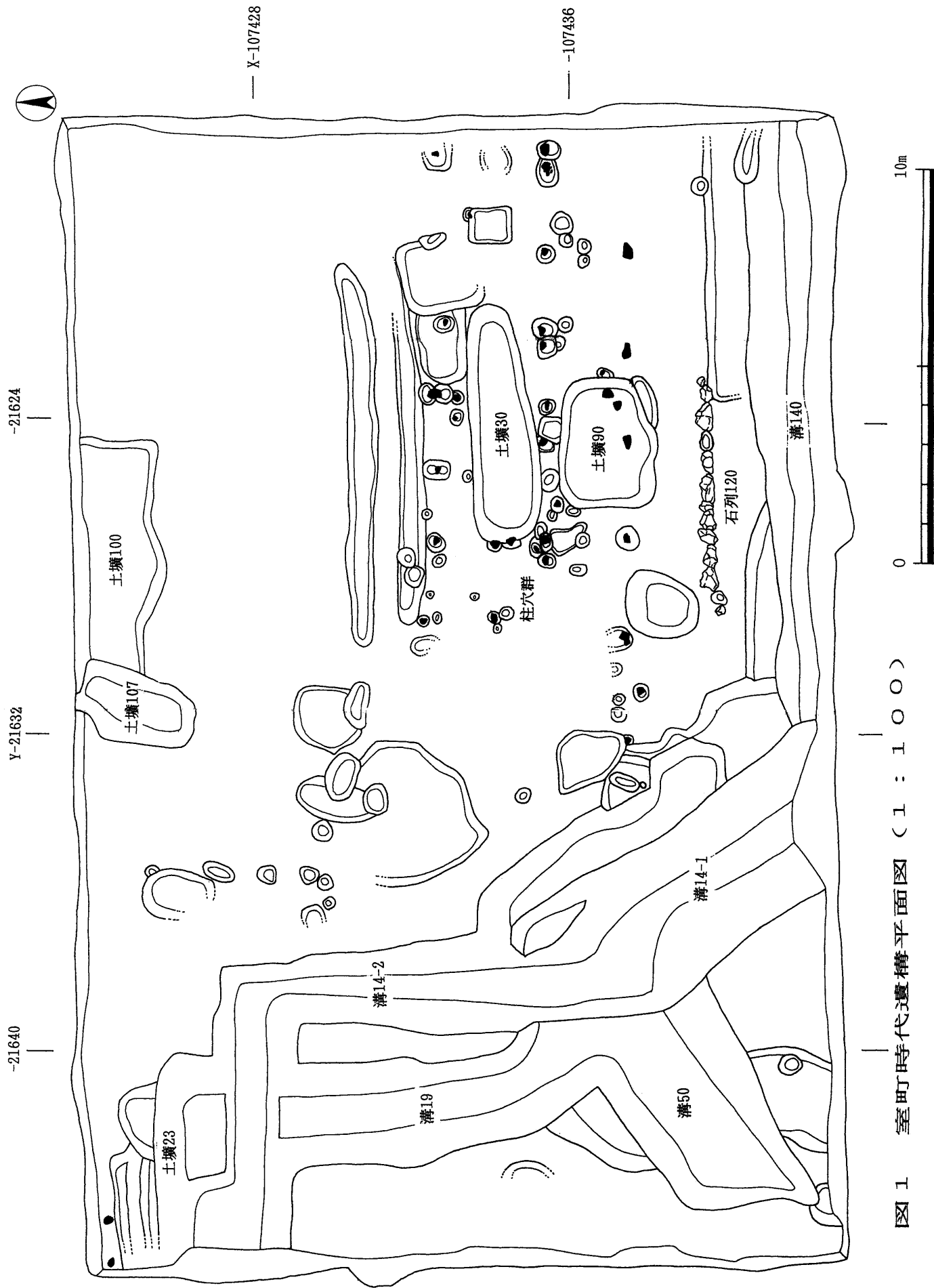


图1 室町時代遺構平面图 (1:1000)

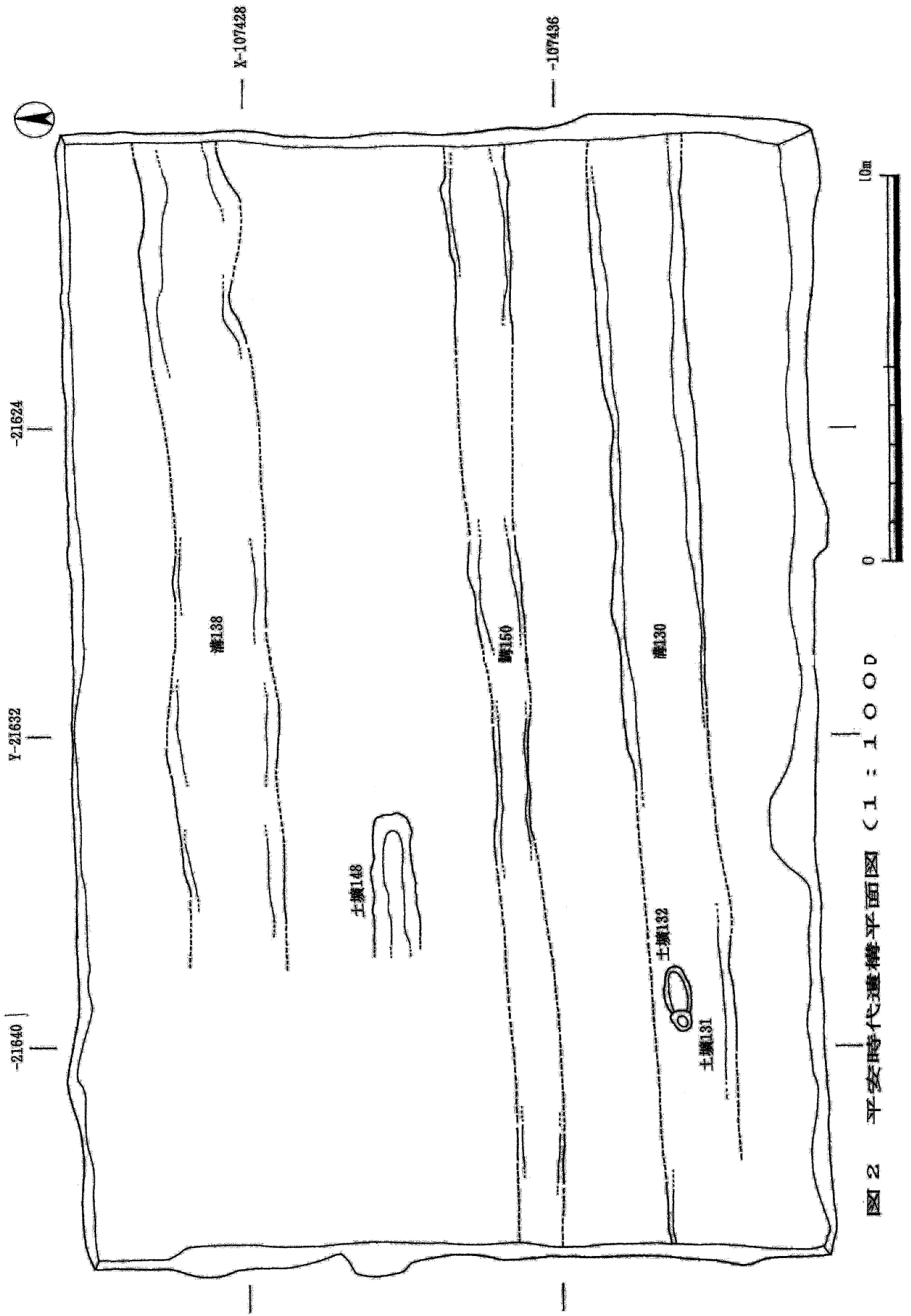


图2 平安时代遺構平面図 (1:1000)